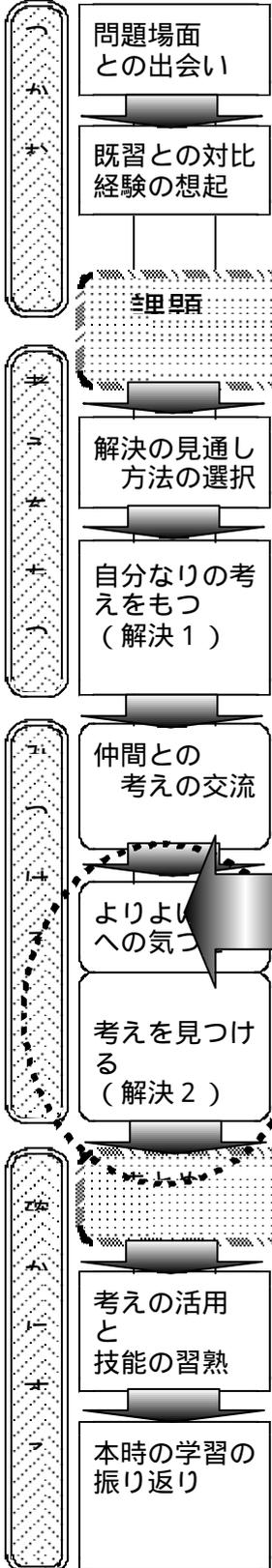


「やっぱり・なるほど」を生み出そう

見直し



他の問題や場面でよりよい方法を見つける

- ・やっぱり、～の方法を使うと早くできるね。
- ・なるほど、だから～という考えがいいんだね。
- ・もう少し～について確かめよ

【ポイント】
「みつける段階」の後半で大切なことは、「交流を通して明らかになってきたよい考え」を、他の問題に適用させて考えようとする事です。一般化は2問以上を解くなかから生まれます。

自分のお気に入りの方法で確かめてみる活動を位置づけましょう
ともすると1問だけ問題をといて、まとめるに移る指導がありますが、子どもがよりよいと思う考えを用いて、問題を解決することこそ、「納得」を生み出すことにつながります。

方法1 「たとえば」「それなら」「もし」・・・から、解決2を生み出しましょう

集団追究の中で、子どもの言葉に着目していると
「たとえば～の時にはどうなるのですか？」
「もし～のときにも、・・・だとおもうんだけど・・・」
「それなら、～」
というように、発展的に適用の場面を想定した言葉がでてきます。この言葉を受け止め、もう一度、児童に切り返すことが大切です。

方法2 解決2を子ども自ら求めるような、指導を継続しましょう

最初から発展的な考察ができる児童は相多くいるものではありません。従って、次のような、継続的な指導の工夫が必要です。

個人追究の場で発展的な視点をもっていた子を意図的に指名しましょう。
友達の説明に「？」「うなずき」の仕草を見せた子に、「どうしたの？」と切り返しましょう。
「たとえば」のことができるように、工夫しましょう。
板書に「たとえばコーナー」を位置づけましょう。
毎時間、「たとえば」コーナーをつかって指導を継続すれば、子どもたちの心の中にも、よりよい考えをみつけるためには「たとえば」が必要であることに気づきます。

「たとえば名人」「それなら名人」「もし名人」をつくりましょう
これらの言葉をつかって話ができる子を価値づけて、他の子どもが意識して使えるようにしましょう。類推・帰納・演繹こそ数学的な思考のポイント（子どもの言葉に表れます。）

「本当にそうなのかな？」という気持ちで解決させましょう。
ただ解決2を行うのではなく、「きっと～だろう」という気持ちで追究させたいものです。